

被攻撃者に関するネガティブな情報と一般的信頼が 攻撃の表出に及ぼす影響¹

Effects of negative information about the victim and general trust on aggressive behavior

大和田 智文²

(専修大学大学院文学研究科)

石崎 一記

(東京成徳大学)

Tomofumi OWADA (Graduate School of Literature, Senshu University)

Kazuki ISHIZAKI (Tokyo Seitoku University)

要 約

本研究では攻撃の表出を、被攻撃者側に攻撃を受けるだけの理由がある場合になされる攻撃と、いわば行きずりに見ず知らずの相手を傷つける攻撃という2つの現象に大別して考え、これらを被攻撃者に関する情報によって相互に区別されうる現象であると想定した。すなわち攻撃の表出には、攻撃者の、被攻撃者に関する情報の捉え方によって違いが生じ、さらにその捉え方には攻撃者の一般的信頼が関与しているのではないかと考えた。そこで本研究では、被攻撃者に関するネガティブな情報の有無と攻撃者個人の一般的信頼の高低が、攻撃の表出に対しどのように影響を及ぼすかについて実験的な検証を行った。その結果、攻撃の表出は一般的信頼の高低に関わらず情報あり条件で有意に低まり、また、第1、第2セッションよりも第3セッションで有意に高まった。本研究を通して、ネガティブな情報を有する人物に対しては、ネガティブな情報を持たない人物に比べて攻撃の表出は低まる可能性が示された。このことは、予め何らかの報復が予期される人物には攻撃を控えようとする反面、報復の可能性の予期されないいわば見ず知らずの人物に対してはより攻撃的となる場面を想定しうる結果であった。

キーワード：攻撃の表出、ネガティブ情報、一般的信頼

問 題

近年、他者に対する暴力行為が盛んに報じられている。暴力場面にみられる攻撃の表出は、被攻撃者側に攻撃を受けるだけの理由がある場合になされる攻撃と、いわば行きずりに見ず知らずの相手を傷つける攻撃とに大別することが可能であろう。こうした攻撃の表出を検討していく際には、

これまでの研究にみられるような攻撃者の個人内過程、集団間過程への言及 (e.g., Diener, 1976; Jaffe & Yinon, 1979; 大和田, 2004 a; 大和田・石崎, 2006; Zimbardo, 1970) などにとどまらず、たとえば被攻撃者に関する情報の評価に関与する攻撃者個人の特性によって、その情報を有する人物への攻撃の表出に違いが生じるかどうか、といった、攻撃者の個人内過程および攻撃者・被

攻撃者二者の個人間過程を含みうる視点からの検証が必要といえよう。

このような視点から、まず被攻撃者側に攻撃を受けるだけの理由（すなわち被攻撃者の有するネガティブな情報）がある場合になされる攻撃の表出について検討する際、菊地・渡邊・山岸（1997）の研究結果は貴重な示唆を提供している。菊地ほか（1997）は、“相手が自分に友好的に振る舞ってくれるだろうと考える客観的な根拠がないにも関わらず、相手の人間性についての肯定的な信念のゆえに抱く”信頼感（p. 24, 以下“一般的信頼”と記載）と、“特定の他者が相互作用の相手に多大な損害を与えるような自己利益追求行動を行うかどうか”（p. 26, 以下“他者の信頼性”と記載）についての正確な判断との関連性について述べており、他者の信頼性の判断に関して、一般的信頼の高い高信頼者は低信頼者に比べてより正確な判断をすることを明らかにしている。この結果は、信頼性の欠如を予期させるような人物に接し、この人物が元来有するネガティブな情報にさらされた場合、このネガティブな人物に対する評価に一般的信頼が及ぼす影響を予測するのに十分な根拠を与えている。

一方、現実場面における攻撃の表出はネガティブな情報を有する人物に向けられるだけでなく、見ず知らずの人物、すなわち、少なくとも攻撃者に対してはネガティブな情報を発していない人物（以下“ネガティブな情報を持たない人物”と記載）に対しても向けられていることは冒頭に述べた通りである。大和田（2004b）によると、ネガティブな情報などを特に持たない人物に対する評価に際しても、一般的信頼が関与する可能性が示唆されているため、ネガティブな人物に対する場合と同様、その評価に一般的信頼が及ぼす影響を予測することが可能である。

さらに大和田（2004b）や大和田・石崎（2006）によると、一般的信頼に基づく他者評価が攻撃の表出に影響を及ぼすことが指摘されてい

たため、ネガティブな情報を有する人物、ネガティブな情報を持たない人物のいずれに接した場合でも、一般的信頼が攻撃の表出に影響するのではないかと考えられる。

そこで本研究では、冒頭に示した二種の攻撃表出のあり方を、被攻撃者に関する情報によって相互に区別されうる現象であると想定し、被攻撃者に関するネガティブな情報の有無と攻撃者個人の一般的信頼の高低が攻撃の表出に及ぼす影響について検証することとする。そして、これらの現象について、攻撃者の個人内過程および攻撃者・被攻撃者二者の個人間過程の視点から理解を得るための基礎資料を提供することを目的とする。

方 法

実験計画

ネガティブ情報（あり、なしの2水準、被験者間配置）、一般的信頼（高群、低群の2水準、被験者間配置）、時系列（第1セッションから第3セッションまでの3水準、被験者内配置）を要因とする3要因混合計画を用いた。

一般的信頼の測定

渡部・林・神・高橋・山岸・山岸（1993）や Yamagishi & Yamagishi（1994）などで開発された11項目からなる信頼尺度の最新版への記入を求めた。各項目は、1（全くそう思わない）から7（強くそう思う）までの7段階で評定するものであった。この信頼尺度は、一般的信頼下位尺度と用心深さ下位尺度より構成されるが、本研究では菊地ほか（1997）などと同様に、“ほとんどの人は基本的に正直である”、“私は人を信頼するほうである”、“ほとんどの人は基本的に善良で親切である”、“ほとんどの人は他人を信頼している”、“ほとんどの人は信用できる”、の5項目からなる一般的信頼下位尺度のみを分析に用いた。

実験参加者

東京成徳大学男子学生21名を対象とした。平均年齢は、19.76歳 ($SD = 1.27$ 歳)であった。実験参加者（以下“参加者”と記載）の一般的信頼得点の中央値は22（範囲13から27まで、71.4%）であったため、得点が21以下の参加者を低信頼者（10名）、22以上の参加者を高信頼者（11名）とし、情報×一般的信頼の4条件の各セルのうち、情報あり・高信頼者条件のセルに6名、他の3つのセルに5名ずつ配置した。本実験では、男子の方がより攻撃を表出しやすい（e.g., Bushman, 1995, 2002；湯川・吉田, 1999）との理由から、大和田（2004 a, 2004 b）や大和田・石崎（2006）と同様参加者を男子のみとした。

手続き

ネガティブ情報あり条件 大淵（1993）によると、攻撃行動（本稿では“攻撃の表出”と記載）とは他者に危害を加えようとする意図的行動であるとされる。これに従うと、たとえば不快なブザー音を他者に意図的に聞かせる行為は、不快刺激という一種の危害を他者に意図的に加える行為と考えられるため、本研究では、以下に示す反応時間課題の中で参加者が対戦相手に意図して与えるために設定したブザー音強度（1から7段階）を攻撃の表出の指標として用いた。なお、このブザー音の第7段階は第1段階よりも有意に不快であることが予備実験により確認されていた（両側検定； $t(8) = 6.00, p < .01$ ）³。

参加者は、“その日の気分が反応時間に及ぼす影響に関する研究”という名目で1名ずつ実験に参加した。

参加者は実験者より、“今日の実験は、別の場所にいるこの実験の本当の責任者（男子大学生）とパソコン上で反応時間を競う課題をやってもらうが、実験責任者は事情があって少し遅れてくるので、最初の挨拶はこの音声聞かせてほしいと頼まれている。実験責任者が到着次第課題を行い、

実験終了後責任者はここ（実験室）に挨拶に来る予定である”との説明を受けた。その際、実験責任者のネガティブな人物像や態度が強調されて録音された実験責任者自身の自己紹介のことばと称する音声（すなわちネガティブな情報）を、参加者への挨拶に用いた。

続いて、攻撃の表出を測定するための“反応時間課題（reaction time task）”をパソコン上で行った。表向き対戦相手と反応の速さを競う反応時間課題は、従来より攻撃の表出を測定する方法として一般的に用いられてきている（e.g., Bushman, 1995, 2002；Bushman & Baumeister, 1998；大淵, 1979；Ohbuchi, 1982；大和田・石崎, 2006；Taylor, 1967；湯川・吉田, 1998, 1999, 2000）。参加者はヘッドフォン（トライコーポレーション・マルチメディアヘッドホン IMA-07シリーズ）を装着し、以下の手順に従って別の場所にいるとされる実験責任者と反応時間を競った。すなわち、(a)各試行に先立ち、参加者と対戦相手は次の試行で相手に与えるブザー音強度を7段階の中から設定し合う。その際、互いに設定したブザー音の強度が双方の画面に表示される、(b)画面に“GO”と表示されたら、できるだけ速くマウスをダブルクリックする、(c)ダブルクリックの速さで相手に勝った場合、予め強度設定がなされているブザー音を相手に与え、負けた場合相手からブザー音をもらう、という流れであった。まず最初の1試行を練習試行とし、その後8試行からなるセッションを3回（合計24試行）行った。対戦相手のブザー音強度は、第1セッションにおいては1から3（低い挑発）、第2セッションにおいては3から5（中程度の挑発）、第3セッションにおいては5から7（高い挑発）が無作為な順序で設定されるように⁴、また、勝敗はセッションごとに無作為な順序で4勝4敗になるように予めプログラムされていた。

最後にデブリフィングを行い、実験は終了した。本実験のカバーストーリーに対して疑いを持った

Table 1 ネガティブ情報の有無および一般的信頼ごとのブザー音強度の平均値（低信頼者(SD)/高信頼者(SD)）

指 標\情 報	なし	あり
ブザー音強度（第1セッション）	33.4 (10.59)/26.4 (4.08)	21.5 (8.02)/19.2 (12.75)
ブザー音強度（第2セッション）	32.2 (7.08)/34.8 (6.71)	25.5 (10.26)/23.8 (11.33)
ブザー音強度（第3セッション）	43.4 (6.53)/39.2 (4.45)	30.5 (14.64)/30.3 (11.57)

参加者はいなかった。

なお、本手続きにおいて実験責任者や対戦相手は存在しなかった。

ネガティブ情報なし条件 ネガティブ情報あり条件の場合と同様、参加者は“その日の気分が反応時間に及ぼす影響に関する研究”という名目で1名ずつ実験に参加した。

参加者は実験者より、“今日の実験は、別の場所にいる相手とパソコン上で反応時間を競う課題をやってもらう。対戦相手は男子大学生だが、対戦相手が誰であるかはお互いに知らされることはない”との説明を受けた。

続いて、攻撃の表出を測定するための“反応時間課題 (reaction time task)”をパソコン上で行った。反応時間課題の内容や実施方法については、ネガティブ情報あり条件の場合と同様であった。

最後にデブリフィングを行い、実験は終了した。本実験のカバーストーリーに対して疑いを持った参加者はいなかった。

なお、本手続きにおいて対戦相手は存在しなかった。

従属変数

攻撃の表出（ブザー音強度）：反応時間課題で設定したブザー音強度（設定強度の1から7まで）の8試行の合計値をセッションごとに算出した。

実施時期

2003年6月上旬から10月下旬であった。

結 果

情報あり・低信頼者条件に配置された参加者1名につき、一般的信頼尺度への回答上の問題が実験後明らかになったため、分析より除外した。

セッションごとのブザー音設定強度の平均値および標準偏差を Table 1 に示した。

ブザー音設定強度について、ネガティブ情報（あり・なし、被験者間配置）×一般的信頼（高・低、被験者間配置）×時系列（3セッション、被験者内配置）を要因とする3要因混合計画の分散分析を行った。結果は、情報および時系列の主効果が有意であった ($F(1,16)=6.17, p<.05$; $F(2,32)=9.82, p<.01$)。多重比較 (LSD法) の結果、設定したブザー音強度は第1、第2セッションよりも第3セッションで有意に高かった ($Mse=58.84, ps<.05$)。

すなわち、ネガティブな情報を有する相手に対する攻撃の表出は、このような情報を持たない相手に対する攻撃の表出よりも有意に低くなることが示された。また、セッションの最終段階である第3セッションにおいて、攻撃の表出が有意に高まることが示された。一般的信頼による有意な差は確認されなかった。

考 察

既述のように本研究においては、ネガティブな情報を有する相手に対する攻撃の表出は、このような情報を持たない相手に対する攻撃の表出よりも有意に低くなることが示され、また、最終セッションである第3セッションにおいて攻撃の表出

が有意に高まることも示された。しかしながら、一般的信頼による有意な差は確認されなかった。そこで以下の考察では、こうした結果を踏まえ相手情報の有無による攻撃表出のされ方の違いを中心に議論する。

まず、一般的信頼の高低に関わらず情報あり条件で攻撃の表出が有意に低まった点に関しては、以下のようなことが考えられた。第1に、本実験で提示された自己紹介のことは参加者にとって過度にネガティブなものであった可能性がある。その場合、参加者は対戦相手からの過度にネガティブな情報にさらされたことにより、対戦相手へ認知的感情的にネガティブな関与を余儀なくされたと同時に相手が攻撃的な態度や意図を持っているかのように感じ、さらには攻撃を表出することによって相手から一層の報復を招く危険性さえあると判断したため、このような相手に対する攻撃の表出を控えたのではないかと推測される。この説明は、相手が明確な攻撃的意図を持っているものと感じられたり、怒りの表現が相手からの報復を招く危険性が強いと思われるようなときに怒りの抑制が行われるという、大淵（1986）の指摘とも一貫している。第2に、情報あり条件では参加者と実験責任者が実験終了後に出会うという状況設定がなされていたが、この状況が攻撃の表出を高めることによる後の出会い場面での気まずさを参加者に予期させたがゆえに、相手を攻撃することへの遠慮が生じた可能性も考えられる。

次に、最終セッションである第3セッションにおいて、一般的信頼の高低に関わらず攻撃の表出が有意に高まった点に関してであるが、この理由については2次の交互作用も確認されなかったことから、セッションの進行に伴った対戦相手のブザー音強度の上昇を、参加者は彼らの置かれた状況や個人特性に関わりなく一様に対戦相手の挑発と理解したため、参加者自身も徐々にブザー音強度を強めていったのではないかと考えられた。このことは、課題遂行中の参加者が対戦相手との相

互的な攻撃的事態に置かれていたと理解できる。

以上より、ネガティブな情報を有する人物に対しては、ネガティブな情報を持たない人物に比べて攻撃の表出は低まる可能性が示された。このことは、予め何らかの報復が予期される人物には攻撃の表出を控えようとする反面、報復の可能性の予期されないいわば見ず知らずの人物に対してはより攻撃的となる場面を想定しうる結果であったといえる。ただし、本研究では当初予想していた一般的な信頼の攻撃表出への影響は確認されていないため、この点については今後さらに理論の精緻化を試みていく必要があるだろう。

引用文献

- Bushman, B.J. 1995 Moderating role of trait aggressiveness in the effects of violent media on aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 69, 950-960.
- Bushman, B.J. 2002 Does venting anger feed or extinguish the Flame? Catharsis, rumination, distraction, anger, and aggressive responding. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 28, 724-731.
- Bushman, B.J., & Baumeister, R.F. 1998 Threatened egotism, narcissism, self-esteem, and direct and displaced aggression: Does self-love or self-hate lead to violence? *Journal of Personality and Social Psychology*, 75, 219-229.
- Diener, E. 1976 Effects of prior destructive behavior, anonymity, and group presence on deindividuation and aggression. *Journal of Personality and Social Psychology*, 33, 497-507.
- Jaffe, Y., & Yinon, Y. 1979 Retaliatory aggression in individuals and groups. *European Journal of Social Psychology*, 9, 177-186.
- 菊地雅子・渡邊席子・山岸俊男 1997 他者の信頼性判断の正確さと一般的信頼 — 実験研究 実験社会心理学研究, 37, 23-36.
- 大淵憲一 1979 友好刺激に対する無反応としての Hostility 心理学研究, 50, 249-255.

- Ohbuchi, K. 1982 Negativity bias: Its effects in attribution, hostility, and attack-instigated aggression. *Personality and Social Psychology Bulletin*, 8, 49-53.
- 大淵憲一 1986 質問紙による怒りの反応の研究：攻撃反応の要因分析を中心に 実験社会心理学研究, 65, 127-136.
- 大淵憲一 1993 人を傷つける心 — 攻撃性の社会心理学 — サイエンス社
- 大和田智文 2004 a 集団状況と一般的信頼感が攻撃行動に及ぼす影響 — 低信頼者は集団だと攻撃的になるのか? — 日本発達心理学会第15回大会発表論文集, 50.
- 大和田智文 2004 b 被攻撃者に関する情報と一般的信頼が攻撃行動に及ぼす影響 — 低信頼者は部外者に対して攻撃的になるのか? — 日本心理学会第68回大会発表論文集, 151.
- 大和田智文・石崎一記 2006 攻撃行動に影響を及ぼす状況要因と一般的信頼に関する検討 対人社会心理学研究, 6, 15-22.
- Taylor, S.P. 1967 Aggressive behavior and physiological arousal as a function of provocation and the tendency to inhibit aggression. *Journal of Personality*, 35, 297-310.
- 渡部 幹・林直保子・神 信人・高橋伸幸・山岸俊男・山岸みどり 1993 個別的信頼と一般的信頼 — 質問紙調査 日本グループ・ダイナミックス学会第41回大会発表論文集, 126-127.
- Yamagishi, T., & Yamagishi, M. 1994 Trust and commitment in the United States and Japan. *Motivation and Emotion*, 18, 129-166.
- 湯川進太郎・吉田富二雄 1998 暴力映像と攻撃行動：他者存在の効果 社会心理学研究, 13, 159-169.
- 湯川進太郎・吉田富二雄 1999 暴力映像が攻撃行動に及ぼす影響 — 攻撃行動は攻撃的な認知および情動によって媒介されるのか? — 心理学研究, 70, 94-103.
- 湯川進太郎・吉田富二雄 2000 暴力映像と攻撃行動：怒り喚起の効果 筑波大学心理学研究, 22, 139-149.
- Zimbardo, P.G. 1970 The human choice: Individuation, reason, and order versus deindividuation — impulses, and chaos. In J. Arnold and D. Levine (Eds.), *Nebraska Symposium on Motivation*, 1969, Lincoln: University of Nebraska Press. pp. 237-307.

注

- 1 本研究は、東京成徳大学大学院心理学研究科2003年度修士論文の一部に加筆・修正を行ったものである。なお本研究は、日本パーソナリティ心理学会第13回大会にて発表された。
- 2 本研究の実験実施にあたり、湯川進太郎講師（現筑波大学）には貴重な御示唆をいただきました。深く感謝申し上げます。また本稿執筆にあたり、専修大学の下斗米淳教授より御指導を賜りましたことを、ここに記して深く感謝申し上げます。
- 3 この予備実験では、不快刺激として第1段階と第7段階のブザー音を用いた。これは、ブザー音強度（音量）を最小値から最大値へ上げることによって参加者の不快感がどの程度変化するかを確認するために行った。参加者に対しては刺激提示に先立ち、画面に表示されるブザー音強度の数字が大きくなるほどブザー音も大きくなるとの説明がなされていた。そのため、参加者の不快感の変化は、単にどれだけの強度の音を聞かされるかにとどまらず、このブザー音強度を示す数字の変化（1から7へ変化）によっても影響されていたものと考えられた。t検定の結果が有意であったことから、ブザー音強度および数字と不快感との間で一次関係が確認された。よって本実験においても、ブザー音の各段階における強度（dB）を厳密に測定せずとも、ブザー音強度および数字により不快感を操作することが可能であると考えた。
- 4 反応時間課題における参加者と対戦相手との相互作用が、参加者にとっては明らかに攻撃事態であると理解される必要があった。そのため参加者に対して、対戦相手のブザー音強度設定の時系列的な上昇による挑発を行い、攻撃事態を導入した。またその効果を確認するための手続きとして、時系列を被験者内要因とした。